

FA 協会メールマガジン第 10 号

▼理事からのメッセージ▼

「ゴールベース資産管理」の「ゴール」が元の英語で複数形の Goals であることの意味

NRI アメリカ 金融・IT 研究部門長 吉永高士

協会主催の研修やイベントでも何度か説明してきたことですが、ゴールベース資産管理の「ゴールベース」は、90 年代半ば以降に提唱された「ゴールベース・ファイナンシャルプランニング」に由来するものです。それを 2000 年代半ばに大手対面証券会社らフィーベースのアドバイザーらが対面アドバイザー事業やサービス全体を指す資産管理（ウエルスマネジメント）と合体させたものが、ゴールベース資産管理（Goals-based Wealth Management）です。

ゴールベースのファイナンシャルプランニングとは、その定義において「継続性」と「包括性」がビルトインされています。ここでいう「継続性」とは、担当のアドバイザーが顧客とその家族の話を継続的に（最低でも年 1 回）聞きながらプランを継続的にアップデートし、設定された様々なゴール（目標、深刻な課題等）の実現に向けて伴走することが含まれます。生命保険や投資商品を販売するためのファイナンシャルプランやライフプランは、ゴールベースではありません（定義上は、ニーズベースのプランニングと位置付けられます）。

一方、「包括性」とは、顧客ファミリーのゴールを包括的にカバーすることを意味し、たとえば以下のようなものが含まれます。

- ・クライアント本人・配偶者・家族の現在のゴール（日々のライフスタイル、趣味、プチ贅沢、贅沢、住宅・別荘、親族の介護、親族の闘病、学費ほか）

- ・クライアント本人・配偶者の将来のゴール（退職時期、引退初期。中期・後期それぞれのライフスタイル、趣味、プチ贅沢、贅沢、住宅・別荘、本人・配偶者の介護、ダウンサイジングほか）

- ・子・孫等を受益者とする将来のゴール（将来の学費、子育て支援、留学支援、住宅取得支援、重い障害を抱える子・孫・曾孫等の生涯に渡る生活設計支援ほか）

・社会への恩返しや価値観・信条の実現（非営利団体への地道な寄付やボランティア活動、地元や母校・出身地への錦を飾る大口寄贈、私的財団を通じ節税効果も考慮した長期継続的な慈善寄付ほか）

“Die with Zero”が日本でもミニブームになっていますが、「ゴール」には将来のものだけではなく、現在を每秒每秒生きている間にやりたいコトやモノも含まれています。また、「お金が有り余っているので自分でやりたいことはいつでもできるしやっている」富裕層であっても、「もはややり残したことはない」高齢者であっても、子・孫・曾孫等を受益者にするゴールはかならずありますし、自分の死後に実現するそれらのゴールのために長期分散投資を通じて資産運用や資産形成を行う意味や機会がかならずあります。

「ゴールベース」の元の英語は「Goals-based」で、「ゴール」に対応する部分は複数形になっています。元々の英語は単数形だったのですが、フィーベースの対面アドバイザーの業界慣行として「包括性」を明示的かつ意識的に表す複数形が主流になっていきました。私が15年以上前に日本に初めて「ゴールベース資産管理」を紹介した時はその移行期に差し掛かっていたタイミングでしたが、日本に輸入されるほとんどの外来語が複数形の「s」を省略してカタカナ表記されているなかで、簡便的に「ゴール」としました（また、basedを「ベースト」ではなく「ベース」と表示したのも同じ理由からです）。当時は、「ゴールベース」を説明するだけで忌避の態度や嫌悪感を示す人が日本にはまだまだ多かったのですが（「（米国人と違って）日本人はゴールなど持たない」など）、15年以上経った現在では露骨に抵抗する人はさすがに少なくなったのは、投資家、アドバイザー、所属先、プラットフォーマーその他関係者にとっても慶ばしいことです。

おかげさまで「ゴールベース資産管理」の概念やそれに基づく行動が徐々に浸透してきたなかで、「ゴールズベース」という複数形にした言い方は日本ではいまさら普及しにくいかもしれません。しかし、単数形と区別を付けずに表示されるカタカナの「ゴール」が、ここでは「現在と将来」の両方を含む非連続的な長期の時間軸にまたがり、対象の受益者も「本人・配偶者とファミリー、社会」などを多数カバーする包括的なものであるということはずひ心に留めておいていただければと思います。